

令和 5 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01053

研究課題名（和文）19・20世紀転換期フランスにおける排外主義の変容 パリ地域での選挙の分析

研究課題名（英文）Transformation of Xenophobia in France at the end of the 19th century: Analysis of National and Local Elections in Paris Region

研究代表者

長井 伸仁（NAGAI, Nobuhito）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：10322190

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域社会における外国人住民の増加と排外主義の高まりが政治においてどのように議論されていたのかを、19・20世紀転換期パリ地域で実施された地方選挙の分析を通じて考察したものである。当時のパリではブーランジスムに代表されるような排外主義的な傾向をもつ政治潮流が一定の勢力を有していたが、それらは国政上の事柄を主張の中心としており外国人の日常的存在を争点にすることはまれであった。このことは政治的な排外主義が社会的次元に根ざすものではなかったことを示唆する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス近現代史研究では、排外主義の社会的実態については研究の余地が大きく残されている。パリに関しては、もともと選挙の研究が手薄である上に、外国人をめぐる議論と関連づけた分析も少ない。これらの点で本研究は独自性を持つ。また、共生の問題を扱い、それを政治と社会の両面から考察する本研究の問題設定や視角は、社会的にも大きな意義を持つと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes local elections in Paris region at the turn of the 19th and 20th centuries, in order to see how the increasing presence of foreign peoples in urban society was debated in politics. Different movements like Boulangism, that propagated xenophobic discourse and action, focused their arguments on national policy matters, and rarely referred to the presence of foreigners in local communities. This suggests that political xenophobia was not rooted in the urban society.

研究分野：フランス近現代史

キーワード：フランス パリ 選挙 外国人 排外主義

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、19世紀から20世紀初頭にかけてのパリにおける市行政や選挙、住民の日常生活、地方出身者の都市社会への統合、カトリック教会の活動などについて研究を進めてきた。

ここまでの研究を通じて、域外出身者に対する住民の意識が19世紀を通じて大きく変化していたことが判明した。すなわち、世紀中葉までは[既存の地域住民/域外出身者]の区別が優勢で、外国人は地方出身者と同じ範疇に属する存在として認識されることが多かった。この区別じたいも厳格・固定的ではなく、差異化は、社会階層など他の基準も含めつつ、段階的かつ曖昧になされていた。しかし19世紀末になると、[自国民/外国人]の区別が急速に前景化して他の基準を凌駕するようになり、外国人に対する批判的言動が労働の場などを中心に噴出するようになった。

この変化と軌を一にするように、政治の領域においても排外主義を打ち出す勢力が台頭してくる。1889年1月の下院補欠選挙にブーランジェが立候補・当選したほか、1900年5月に実施されたパリ市議会議員選挙ではナショナリスト右派が市政を掌握した。

以上のような、都市社会における変化(外国人に対する批判的言動の強まり)と都市政治における変化(排外主義を掲げる勢力の台頭)を統一的に把握して長期的な展望のもとに位置づけることが、本研究の問題意識である。

2. 研究の目的

排外主義には大別して、()国際関係レベルでの事象に連動するもの、()日常生活レベルでの事象に連動するもの、の二種類が想定できる。革命以降のフランスに関する限り、当初は()の形が多かったが、しだいに()が顕著になって現在に至っているとみてよい。そうだとすれば、上に述べた19・20世紀転換期パリにみられる排外主義は、この過程にどのように位置づくのであろうか。

同時期にヨーロッパ各地でナショナリズムが高揚すること、各地域で異民族や外国人を敵視する言動が顕著になることは周知の通りである。しかしナショナリズムの高揚と排外主義との関係は単純ではない。フランスにおいても、1881年6月にマルセイユで発生した反イタリア人暴動(「マルセイユの晩鐘」事件)はチュニジアをめぐるフランスとイタリアの競合関係が背景にあった。しかし、同じ南フランスのエグ=モルトで1893年8月に発生した反イタリア人暴動や、90年代にフランス各地で頻発する反ユダヤ人暴動では、国際関係の動向との関連は相対的に弱い。エグ=モルトの事件については詳細な研究がなされているが、イタリアからの移民労働者と地域のフランス人労働者との間に摩擦が存在していたことが指摘されている。したがって、この時期のフランスにおける排外主義には、上に述べた移行の図式に即して述べると()と()がともにみられることになる。

地域社会の変容と[自国民/外国人]の区別の前景化が、国政や地方政治においてどのように議論されていたのか、とりわけ選挙の際にいかなる争点になっていたのかについては、研究の余地が大きく残されている。本研究はこの課題に取り組むことで、社会史と政治史の接続を試みるものである。

3. 研究の方法

本研究は、1889年から1902年までの13年間にパリ地域で実施された国政選挙および地方選挙を取り上げ、選挙運動のなかで外国や外国人がどのように表象され論じられていたのかを、地域社会における外国人の実態と関連づけつつ明らかにすることを目指した。

この13年は、ブーランジスムとドレフェス事件によって区切られている。二つの出来事はともに「世紀転換期のナショナリズム」の具体例とみなされているが、性質は異なる。ブーランジェ将軍は陸軍相在任時に対独強硬姿勢を示したことで人気を集め、運動においても普仏戦争敗北以来の「対独復讐」を体現していた。一方、世紀末に発生した暴動や騒擾は、反ユダヤ主義的なものも含め、国際関係との関連は相対的に弱かった。この時期を対象として連続的に扱うことで、先に述べた排外主義の二形態を視野に収めることができると考えた。

研究に際しては特定の選挙区に注目した。パリ第17~20区は、ブーランジストやナショナリストが相対的に多数の票を獲得した一方で、地方出身者や外国人が多く居住していた。このほかに、特定地域出身者の集住がみられたパリ第3区(ユダヤ系)、第5区(イタリア人)、第11・12区(ドイツ人、イタリア人)、東部郊外のモントルイユ市(イタリア人)なども重点的に分析することとした。

おもな史料は、警察による選挙監視報告と警視總監日報であり、いずれもパリ警視庁文書館B A系列に所蔵されている。補助的な史料として、同文書館が所蔵する警察署日常記録(C B系列)も試験的に閲覧した。

4. 研究成果

(1) 研究の状況

渡航制限が緩和された 2022 年秋に、約 2 週間パリに滞在し文書館で史料調査をおこなった。研究期間中に実施した現地史料調査はこの一度のみであり、閲覧できた史料も当初予定の一部にとどまった。

調査した史料のうち選挙監視報告には、ポスター・ビラ・冊子類のほか、街頭での選挙活動や屋内集会についての警察報告が含まれ、参加住民の様子がうかがえることが期待された。今回閲覧したものをみる限り、投票結果については投票所単位の詳細な報告がなされていたが、選挙集会についての記述は概して簡略的であり、住民の反応を詳しく知ることは困難であった。このほか、郊外の選挙区は市内と同じくパリ警視庁の管轄下にあったものの、情報量に関しては市内に比べて明らかに少なかった。

他方、警視總監日報は市内の政治情勢について相当な関心を寄せていたが、紙幅は限られており、興味深い情報であっても詳細を欠くことが多かった。

(2) 得られた知見

ブーランジスムは、パリでは全国的な動向を大きく上回る票と議席を獲得した。しかし、上記史料にもとづき候補者の選挙運動をみると、改憲や議会批判など国政上の論点が中心になっており、それが選挙区内の社会経済的状況と結びつけられることは少なかった。郊外の選挙区では、パリ市内とのインフラ整備や生活水準の格差が強調されることもあったが、パリ市内ではそうした観点は少なかった。そのような問題に敏感であるべき社会主義者が、それを自身の主張に組み込むのは 1890 年代以降のことであった。

外国人の存在については、警視總監日報にも選挙監視報告にも記述は少なかった。フランス祖国同盟など排外主義を掲げる団体のほか、フランス=イタリア同盟など友好団体への言及はあるものの、パリにおける外国人の日常的存在が選挙の争点になることはなく、また彼らの様相についても閲覧した史料からはうかがえなかった。

他方で、同郷会が選挙に関して活発な活動を展開していたことが確認できた。19・20 世紀転換期のフランスでは地域主義が一定の高まりを示し、同時期のパリでも多数の同郷会が存在していた。同郷会のおもな活動は互助にあったが、選挙に積極的に関与する団体もあり、警視總監日報にはそうした団体の集会についての報告が含まれている。もっとも日報をみる限り、選挙への対応は既存の政治勢力に対し一般的な観点から支持するか否かというものであり、同郷会が持つ言語・文化的特質と結びつけて議論されていた形跡はない。また、同郷会が選挙を離れて平時にどのような活動を展開していたのか、地方出身者が多かったと想定される会員たちは都市パリにおいてどのような存在であったのかについても、今回閲覧した史料からは十分な情報が得られなかった。

(3) 課題と展望

以上の不明であった点については、試験的に閲覧した警察署日常記録が史料として有用と思われる。同記録は、パリの各街区の警察署に住民がおこなった届け出を記した台帳であり、行き倒れや犯罪行為など日常的な問題が扱われている。個々の記述は十数行と短いものが多いが、個人名なども含まれていることは注目に値する。

同じく日常生活の実相を伝える史料として治安判事の文書がある。治安判事は、パリでは各区に配され、家族や近隣の問題の仲裁を業務としていた。したがって治安判事の文書は、警察署日常記録に比べ時間的に長期におよぶ問題が扱われていると考えられる。文書はパリ文書館に所蔵されている。

これとは別に、本研究期間においては 1900 年のパリ市議会議員選挙の分析が十分にできなかった。ブーランジスムについて得られた知見が、ナショナリストが躍進をとげ市政を掌握した同選挙に適用できるかどうか、この間に何らかの転換が生じていないかどうか探り出す必要がある。

以上の史料の活用と研究が今後の課題として残されたことを確認しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長井伸仁	4. 巻 6
2. 論文標題 日露戦争の風刺画	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山川歴史PRESS	6. 最初と最後の頁 16-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長井伸仁、高澤紀恵、松浦義弘、上垣豊
2. 発表標題 「長井伸仁著『近代パリの社会と政治 都市の日常を探る』（勁草書房、2022年）書評会」
3. 学会等名 フランス革命研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 長井伸仁	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 近代パリの社会と政治：都市の日常を探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------